

Robotics Report

新たな常識のはじまり

医師要らずのAIドクターも登場 進化するAIヘルスケア最新動向

nikko am
fund academy



医療・ヘルスケア業界ではAI(人工知能)やロボットの活用が急ピッチで進んでおり、すでに診断時間の短縮や疾病の早期発見に威力を発揮しています。今回は、米国や中国で次々と誕生している医療サービスについてご紹介します。

■ 1分程度で診断結果を出すAIドクター

AIやロボティクス分野の活用がもっとも期待されている分野のひとつが医療・ヘルスケア業界でしょう。先日、最終回を迎えた医療ドラマで、手術支援ロボットが投入されるシーンが話題になりました。このロボットのモデルとなったのが、米Intuitive Surgical社が開発した「da Vinci サージカルシステム(以下、ダ・ヴィンチ)」で、3Dハイビジョン内視鏡や多機能鉗子などが装着された複数のロボットアームが精密な手術支援を行なうロボットです。ダ・ヴィンチが99年に市場投入されてから約19年を経過するまでの間、同分野の技術革新は日進月歩で進んでおり、最近もさまざまな医療用AI・ロボットが生まれています。例えば、米食品医薬品局(FDA)がAI搭載型の医療機器として初めて承認した、糖尿病網膜症診断機器「IDx-DR」があります。この機器は、患者の網膜の写真をシステムにアップロードすれば、AIが網膜症かどうかを1分程度で判断するものです。今後、AIドクターと手術ロボットによる、診断・治療・手術などのワンストップ医療サービスが出現するかもしれません。

このほか、AIによる画像診断は人間の医師よりも正確でスピーディに判断できることが、すでに各国で証明されています。例えば、皮膚がんや認知症の検査、心臓疾患の早期発見などに利用され、日本ではAIの活用で特殊な白血病を見抜いて命が救われた例もあります。5月には、米グーグルがAIを活用した患者の死期を予測するツールの開発を発表し、AI予測医療へ参入する可能性があるかと報じられました。



※写真はイメージです

■ オンライン医療サービスが拡大

中国では、診断や医薬品の購入、病院の予約などができるオンライン医療サービスが拡大しています。今年5月に香港市場に上場した平安健康医療科技(中国平安保険傘下)が運営する「Ping An Good Doctor(平安好医生)」は約6万人の医師と提携しており、2億人近くのユーザーが利用しています。また、テンセント系の「We Doctor(微医)」は約22万人の医師と提携しており、1.5億人超のユーザーが利用しています。こうした最新のオンライン医療サービスにより、中国で社会問題となっている都市部と内陸部との医療格差や、社会保障制度の整備の遅れが解決されるとみられます。今後は、ビッグデータやAIを活用したオンライン診断も期待されます。



※写真はイメージです

技術調査会社BIS Researchによれば、世界の医療産業向けAIの市場規模は年平均45.1%(17年~25年)で成長し、25年に280億米ドル(約3兆800億円*)になると予測しています。医療・ヘルスケア分野における最新テクノロジーの活用は私たちの想像を超えるスピードで拡がりを見せており、今後、ますます普及が進むと思われます。

*1米ドル=110円

上記銘柄について、売買を推奨するものでも、将来の価格の上昇または下落を示唆するものでもありません。また、当社ファンドにおける保有、非保有、および将来の個別銘柄の組み入れまたは売却を示唆するものでもありません。

(当レポートは、株式会社ロボティアの情報をもとに日興アセットマネジメントが作成しています。)

■当資料は、日興アセットマネジメントがロボティクスに関する情報についてお伝えすることを目的として作成したものであり、特定ファンドの勧誘資料ではありません。また、弊社ファンドの運用に何等影響を与えるものではありません。なお、掲載されている見解は当資料作成時点のものであり、将来の市場環境の変動等を保証するものではありません。■投資信託は、値動きのある資産(外貨建資産には為替変動リスクもあります。)を投資対象としているため、基準価額は変動します。したがって、元金を割り込むことがあります。投資信託の申込み・保有・換金時には、費用をご負担いただく場合があります。詳しくは、投資信託説明書(交付目論見書)をご覧ください。